

2017年9月3日(日) 第56回 月1原発映画祭『放射能』上映に向けて

船橋淳監督のメッセージ

今回は、「フタバから遠く離れて」のスピノフとして僕が作りました短編映画「放射能」の上映を通し、現在の福島・原発事故の状況と、いかに〈間〉に広がるものへの想像力が欠落しているのか、その解決はどうあるべきかをお話したいと思います。放射能を例にしますが、それに留まらず、遠く離れた犠牲に対する人々の無感覚＝他人の痛みに対する想起力が試されている現代社会の中で、僕たち市民にできること、なすべきことについて思いを巡らし、皆さんと検討したいと思います。

原発事故から6年以上が経ち、いまなお大部分が帰還困難区域にある双葉町が特定復興拠点の整備・オープンを2022年までに目指しているのをご存知でしょうか。辺野古・高江新基地建設に反対する沖縄県民とアメリカ西海岸の市民が連帯し、新たな米軍基地拡張を阻止する動きを生んでいるのをご存知でしょうか。――ともに当事者意識を強く試されるニュースです。

福島原発事故をはじめ、誰もが責任逃れをするなか、どうやって当事者意識をシェアできる社会にするのか。

ジャーナリズムが取り上げない〈間〉の人々へ想像力を、どうやって働かせるのか。

NIMBY (Not in My Backyard の略。環境問題について「他人はどうでもいいが、自分には勘弁してほしい」という意識を問題化した言葉) に向き合うため、僕たちに何ができるのか。

じっくりと考える時間にしたいと思います。

*以下のエッセイを参照ください: 「〈間〉に広がるもの 船橋淳」

<http://nuclearnation.jp/jp/radioactive/>

船橋 淳